

実質 15 日間、ポーランドとイスラエルに行って来ました。今日は福音集会なので、ポーランドとイスラエルで見た事も踏まえて、「イエス・キリストの救い」について一緒に考えたいと思います。

フランクフルト経由で関空からポーランドへの飛行機で、お互い初対面ですが、隣の青年と自然と話が弾みました。ある公立大学医学部で、医師国家試験を受けたばかりの学生。自己採点したら、まず合格間違いない。えらい自信です。合格間違いないしグループが 6 人で卒業旅行。「お金も親に出してもらったんです。随分苦しい勉強などあったけど、ようやく一息つきました。フランクフルト経由でスペインに行って、1 か所だけですぐ帰ります。」見るのはサッカー。FC バルセロナのメッシが大好きで、試合のチケットが手に入った。3 万円。航空チケット 16 万円。宿泊代 4 万円。1 回サッカーの試合見るだけで 23 万円! 思わず「ちょうだい…。」「サッカーというより、メッシを見たいんです。尊敬してるんです。3 万なんか安いもんです。」メッシの話になったら止まらへん。

私も隙あらばイエスの話をしたいけど、イエスがメッシに負けてるみたいな感じで。もうメッシ大好き!

彼によると「すごく仕事ができる人は、自分が得意な事を仕事にしている。労働者の大体 2 割くらい。普通にこなしている人は、得意な仕事をしていないけど頑張っている。仕事が上手い出来ない人は、苦手な事だけど、好きな事を仕事にしている。得意な事と好きな事は、残酷なまでに違う事が多い。それはメッシを見たら分かる。メッシはサッカーゴールの 20m 四方の中では世界最高の選手だけど、絶対にディフェンスに行かない。ディフェンスに出たら、ただの平々凡々の選手で終わるから。自分が一番力を発揮できる場所に留まって、思う存分やっている。」

「だから僕は、自分の得意な事だけをやっていきたいと思っているんですよ。苦手な事はしたくない。僕は医者として、というか人間として 1 番苦手な、ずっと苦手意識があるのは死と向き合う事なんです。」  
「でも病院勤務したら、絶対それあるで。」「それ言わんとして下さい。だから、できるだけ死が遠い科に行きたい。産婦人科。担当している患者さんが、一生懸命治療したのに最後亡くなってしまったというのを毎月何十年もやってたら、自分は絶対ダメになる。折れてしまう。だから、命の誕生の産科に行きたいと思ってます。実は産科に行った時にすごく感動した事があって、それで決めたんです。」

ある妊婦さん。まだ子供を持つつもりがなかったのに、想定外に妊娠してしまった。それで、人生設計を一からやり直さなければならない。というか、自分が立てていた計画が全部狂ってしまった。

小説・テレビ・ドラマでは、みごもった女性が「ああ、嬉しい!」でも全然、思えへん。そこに心が責められる。母親になるのに、お腹にいる赤ちゃんの事を少しも喜べない。

「おめでとう」と言われる度にしんどくなって来る。「愛さなければ、受け入れなければ」と思うけど、思えば思うほどドンドンしんどくなって「この子を愛する事ができない。受け入れる事ができない。」

看護師さんたちが付き添って、説得したり、話を聞いたりしていたのですが、もうしんどそう。

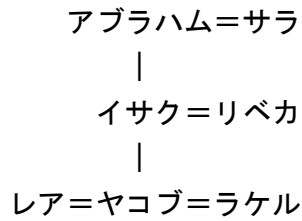
お産がしんどいというよりも、子供を受け入れる事ができない自分を受け入れる事ができない。

40 時間くらいかかった、ものすごい難産でした。しかし帝王切開する事なく、自然分娩で産まれて来た赤ちゃんを胸に抱いた時、赤ちゃんが胸に吸い付いて来たその瞬間「かわいい!」スイッチがパチン! と入ったみたい。「僕はこれを見た時に産科医になろうと。」妊婦さんが赤ちゃんを産むのは当たり前ですが、彼はそこにエピソードではなくて物語を見たのですね。赤ちゃんを受け入れているお母さんの姿の中に、愛の物語を見ている。私たちは、人生の中に物語を欲しているように思います。

ただ事実の羅列ではなく、人生に起こって来た色々な出来事・エピソード・事実には何かの意味がある。価値が・理由が・ストーリーがあると思いたいのではないですか？

私が今日紹介したい神様という方は、皆さん一人ひとりに素晴らしいストーリーを持っている方です。「神であるわたしの素晴らしい物語の中に、あなたも是非加わって欲しい」と願っている方。神様は私たちを・あなたをお造りになった方。人が作った神じゃない。人をお造りになった方。あなたの作者である方は良い方。神は良い方です。良い方からは良いものしか出てきません。

ユダヤ人も物語が好きな民族です。ユダヤ民族、或いはイスラエル民族と言いますが、その先祖はアブラハム。息子はイサク。イサクの息子がヤコブ。神様がヤコブに「名前をイスラエルに変えなさい」と言われてイスラエルになりました。アブラハムの奥さんはサラ。イサクの奥さんはリベカ。ヤコブには奥さんが2人いてレアとラケル。



アブラハムーイサクーヤコブ。これが族長たち/父祖たちと言われています。

イスラエルで伺った話です。イスラエルをヘブライ語で書くと、**ישראל**(\*ヘブル語は右から左に読みます)  
◀(ユッド)はイサクとヤコブの頭文字。◀(シン)はサラの頭文字。◀(レーシュ)はリベカとラケル。  
א(アレフ)はアブラハム。ל(ラメッド)はレア。  
イスラエルの名前の中に、自分たちのルーツが全部入っている。それだけではない。

◀(ユッド)はヘブライ語 26 文字の中で一番小さい。ל(ラメッド)が一番大きい。  
小さく始まって大きくなる。ユダヤ人たちは、初めは小さなスタートだったかもしれない。しかしやがて、アブラハム契約に基づいて「あなたは偉大な国民になる。あなたは『ガドール/大きな』、誰も数える事ができない大きな民族になる。」

更に、最初の3つの言葉 **ישׁר** は「ヤシャール/まっすぐ・純粹・忠実」。最後の言葉 **אל** は「エル/神」。「ヤシャールエル」とは「神に向かってまっすぐ。神に対して純粹・忠実」。

時々、ものすごく悪い事をした犯人が、メチャクチャいい名前・立派な名前という事があります。「親泣くで。こんないい名前つけてもろて、何してんねん!」と言いたくなる。私たちが話した言葉はその通りならへん。細井太(ほそい ふとし)君とか、弱井強(よわい つよし)君とか。  
だけど、神の言葉は必ず成ります。「神はヤコブに対して『名前を変えて、イスラエルにしなさい。神に対して忠実な者に、わたしがするから』と言われた」という物語で聞くんです。

先程言ったように、私たちをお造りになった神は良い方です。良い方からは良いものしか出ません。この良い方は、悪い物語にいる人たちを良い物語に加えて、人生を変えてしまう方です。神様から離れてどうにもならなくなった人類を、良い結論に持っていくために、神は救い主をお与えになりました。それが、**イエシュア ハ マシアハ**(イエス・キリスト)です。  
今日は、このイエス・キリストがもたらして下さった3つの祝福について考えたいと思います。

ヘブル 2:14-18 そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。当然ながら、イエスは御使いたちを助け出すのではなく、アブラハムの子孫を助け出してくださるのです。したがって、神に関わる事柄について、あわれみ深い、忠実な大祭司となるために、イエスはすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それで民の罪の宥めがなされたのです。イエスは、自ら試みを受けて苦しまれたからこそ、試みられている者たちを助けることができるのです。

ここで、イエス・キリストがこの世界に来て十字架にかかって下さった事、3 日目に復活した事によって、私たちに少なくとも 3 つの祝福がもたらされたのを説明しています。

**第 1 の祝福**：そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました（神が人となった）。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、

この世界には、目に見えない唯一真（まこと）の神様がおられます。が同時に、目には見えないけど、霊的な存在で、**死の力を持つ悪魔**があると、聖書ははっきり語っています。

**死の力を持つ**とは何を意味するのでしょうか？ 聖書によると**死**は不自然なものです。神は人間をお造りになる時、初めから死ぬ者として設計していませんでした。死は命を破壊するもの。神が死をつくったのではありません。罪の結果、罰として入って来たものが死です。

**死の力を持つ者**は、死という刑罰を神と人々に訴えます。『こいつは生きるに値しない。』『彼にふさわしいのは罰です。』『彼は祝福された人生に似つかわしい者ではありません。悪い事ばかりやって来たから。』

私たちの心を責め立てて、罪責感でいっぱいにする。「もう、人生のやり直しはきかない」と、心をへし折るために働きかけている霊的な力。これが**死の力**。神に対しても、罪を犯した本人に対しても、「罪を犯したのだから、当然罰を受けるべきだ！ 祝福されてはならない！ ふさわしいのは不幸だけ！」と思込ませようとする力です。

昔読んだエッセイで外国のお話です。両親とお兄ちゃんと妹の一家が、ひと夏のバカンスでお父さんの実家に出かけました。お兄ちゃんと妹はお母さんが違います。おばあちゃんが住んでいる実家は豪邸で、大きな庭と池があり、御殿か宮殿のような所。池にはアヒルがいて、おばあちゃんはその卵をととても楽しみにしていました。

ある日、お兄ちゃんが「アヒル、ちょっとビックリさせたら」と思って、パチンコをピューン飛ばした。そしたらアヒルに命中して、苦しんで、最終的に死んでしまったのです。「しまった！」彼はアヒルを小屋の裏に埋めて証拠隠滅。「アヒルは他にもいてるから分からねえわ」みたいな。それを、妹が見てた。

妹はいつもお兄ちゃんにいじめられてたので、逆襲が始まりました。お父さんが「洗車するから手伝って。」「お兄ちゃん、やってきて。」「なんで、俺ばかり行かなあかんねん。」「あ・ひ・る」「分かった…。」お父さんが「雑草抜くの手伝って。いや、君たちでやっててくれ。」「はい。お兄ちゃん 1 人でやって。」「なんで俺だけやねん。」「あ・ひ・る」。弱みを握られている。

両親はその事を全く知りません。「この夏、ずいぶんお兄ちゃんになったね。1 つも口答えしないで、一

生懸命お手伝いして素晴らしい。成長したなあ。」喜んでやってるんじゃない。彼を懸命に労働に駆り立てているのは恐れです。「ばれたらどうする…?」妹は容赦しない。「あ・ひ・る」。こわっ!

ずっと妹から頭押さえつけられてたらたまらん。それで思い余って、おばあちゃんに言いに行きました。「僕、殺すつもりじゃなかったけど、石がアヒルに的中してしまって。死なせてしまってごめんなさい!」そしたら「知ってたよ。辛かったね。あなたが自分から言いに来るのを待ってたんだよ。おばあちゃんは赦してるからねって、赦しを与えようと思ってずっと待ってた。ようやく来てくれて嬉しいなあ。」妹は和解の事を知りません。「お父さんが呼んでるよ。代わりにやって来てよ。」「行かない。」「あ・ひ・る」。 「ゆ・る・し」。

もう赦しを得ていたら、恐れがないですよ。悪い事をした者には罰があるべきだ。でも、その人が赦しを得たら、今後どんなに恫喝されたとしても、言い返す事ができます。罪責感を持っていたら、健康に生きる事は難しいと思います。何かをする動機が恐れだったり、エネルギーが後ろめたいものなら、本当の意味で、喜びの人生にはなりません。

見かけ上は、とても良い息子として両親を助けているようでも、心の中は「くそーっ!」と「怖い!」この罪責感の問題がこびりついて、昔やってしまったとんでもない問題にいつも返ってしまう。そして「私はダメなんだ」と自分で自分を罰し続ける事によって、選べたかもしれない道を選ばず、貰えたかもしれないチャンスを見逃し、神様が本当に生かしたいと思っている人生を見送り三振してしまっている人、案外多いんじゃないでしょうか?

**死の力**は「人間は罪を犯した。だから罰を受けるのが当然。」「あなたにふさわしいのは罰だ!」。人の不完全な良心に訴えて、「だから、おまえはダメなんだ」と私たちの心を折ろうとする力です。

それに対して、**それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし**ここの「滅ぼす」は「消滅させる」という意味ではなく、「効き目を無効にする」という意味。悪魔が「おまえはあんな罪を犯した。あんな過去があった。あんなに恥ずかしい昔の事があった。だから、おまえの人生には再生はない!」

その時「いや、お前のその訴えは、私には効かない! なぜなら、私はイエス・キリストの死によって、赦しを得ているからだ!」

全く罪のない、死ななくてもよいイエス・キリストが、私の罪の身代わりとなって、罪の償いをして下さった。だから、もはや悪魔といえども、私を訴える事はできない。悪魔が神に訴えても、神は却下します。「彼の罪の償いは、イエス・キリストが全て成し遂げておられるのだ」と宣言して下さるのです。

**第2の祝福** ; **死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。**

**死の恐怖からの解放。**キリストは十字架にかかって死に、墓に葬られ、3日目に復活され、それによって、死後の世界についての情報を語り、自らが天国を保証されました。「死んだ後、ゼロになるんじゃない。キリストの救いに与るなら、私たちは天国に行く事ができる。天国は本当にある。魂の故郷に立ち返る事ができる。」

キリストが来るまでの時代は旧約時代です。旧約聖書を読むと、死後の世界について、殆ど情報はありません。極々僅かに、光りきらめく世界について書いたり、ほのめかしている箇所があります。

しかし、旧約聖書の基本的な死の扱いは、何か不確か・陰鬱・恐ろしい世界。これから行く所が恐ろしく・おぞましく・陰鬱な所だと思ふなら「何が何でも、そこには行きたくない」と、この世にしがみつくのではないですか？

だけどキリストは、**死の恐怖**をなくすために「死の次に来るのは地獄だけじゃない。永遠の天国がある」という事を、復活によって明らかにしました。それによって、**死の恐怖からの解放**があるのです。

帰りのフランクフルトから関空まで、イスラエルから勘定したら 21 時間。長い。腰痛持ちにはたまりません。何回も立ったり座ったりしながら、これはもう映画見るしかない。3 本見ました。

1 本目は「わたしを離さないで」というほんまに暗い映画。ノーベル文学賞のイシグロさんを思い出しましたが、全然違う映画でした。いらぬ映画。2 本目は良かった。「今を生きる」。

3 本目は「ターミナル」。トム・ハンクス。これは笑いました。中央アジアのナントカいう国からニューヨークのジョン・F・ケネディ空港に向かっている一人の男。彼が飛行機に乗っている最中に母国でクーデターが起こった。しかしアメリカは、乗っ取った新政府は暴力的だと言って、国として承認しない。それで彼がアメリカに到着した時、パスポートは無効。母国に帰る事もできず、空港から一步も外に出る事もできず。色々あるのですが「頑張れよ、頑張れよ」と見てました。

空港は中継地点であって、空港を目的地として旅をする人はいないと思います。到着したら、そこから最終目的地に向かって出発しますね。この地上の人生は、永遠の世界に至る手前の中継地点です。中継地点に家を建てる人いますか？ いてるやん。みんな。中継地点に永住しようとする人はいません。でも、次に行く所が分からない。行きたいのに行けない。それで主人公は止むを得ず、中継地点である空港に住まいを建てて住むんです。

こちらに陸地があって、川があって、向こう岸がある。中継地点というのは橋です。橋の上に家を建てる人、いるでしょうか？ 次に行く所が分からない・ハッキリしない・行けるかどうか分からない。

だから中継地点にしがみついて、いつまでもいようとするのですが、それはできません。

長く生きても 100 年・120 年。なぜ、そんなに今の世界にしがみつくなの？ 次に行く所が見えないから。

でも聖書は「イエス・キリストがよみがえる事によって、人は死んでゼロになるんじゃない。陰鬱な世界だけが待っているんじゃない。」私たちの罪がイエス・キリストによって全て帳消しにされたのなら、大歓迎の中、私たちの魂を造って下さった方の元に帰る。創造主のところ・故郷に帰る事ができます。

**第 3 の祝福**；したがって、神に関わる事柄について、あわれみ深い、忠実な大祭司となるために、イエスはすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それで民の罪の宥めがなされたのです。

「あわれみ深い、忠実な大祭司」の大祭司は「仲介者」という意味です。大祭司/仲介者は神に対しては忠実、人に対してはあわれみ深い。

日本語の「あわれみ深い」のイメージはどんなものでしょう？ あわれみ深い人は、人の不幸を見た時、気の毒に・かわいそうにと思う人。何となくそんなイメージが多いのではないですか？

「あわれみ深い」はギリシャ語で「エレエモン」ですが、ここはヘブル的背景で語られていて、大祭司はユダヤ人の大祭司。エレエモンに対応するヘブライ語は「ヘセッド」。

「ヘセッド」は色々辞書を調べたら、相手の心の中に入って、その人の立場で見・考え・感じる事。自分の観点から見て「ああ、かわいそうに」ではない。その人の立場に立って、その人が感じるように感じ、その人のものの見方で考える事。それが「あわれみ深い/エレエモン/ヘセッド」。相手の立場に立って共感できるのは素晴らしい事・能力だと思います。

『絶望読書』という本が家にあるんですが、いい本ですよ。著者は頭木弘樹（かしらぎ ひろき）さん。絶望シリーズを5冊くらい出していて、2か月ほど前に『絶望名言』が出たので、思わず飛びつきました。彼は20歳（はたち）の時に、国の難病指定の病気になったんです。薬がない。医師から「あなたはもう社会人にはなれません。治りません。誰かの世話になって生きていくしかない」と通告されて、6人部屋で長期入院。その病室で自分が1番年下で20歳。「みんなは青春を謳歌しているのに、何で自分だけこんな風になってしまったんだろう。その時に自分を慰めたのは、明るい言葉じゃなかった」と。

普通、名言は、人の心を前向きにしたり、人生を肯定したり、励ます言葉が多いかもしれません。例えば「諦めないでいたら夢はかなう」とか「明るい気持ちでいたら幸せな事しか起きない」とか。自己啓発のコーナーでよくあります。私はひねくれてますから、「そんなのあるかい!」みたいなね。そんな本には食指が伸びない。だけど、そういう本があってもいいと思います。

「諦めないでいたら夢はかなう」はメダリスト・勝利者がよく言う言葉ですね。でも時と場合によって、これは、きつい言葉になりませんか。どんなに頑張ってもダメだった時に「諦めないでいたら夢はかなう」って聞いたら鬱陶しくないですか？ 辛い事が起こった時「明るい気持ちでいたら幸せな事しか起きない」って言われたら、「ちょっと黙ってくれる？ それ、聞きたくない。」

頭木さんは長期療養の中で「人の慰めが、しんどくてしんどくてたまらんかった。」ところが、そういう時に、絶望名人カフカと出会いました。カフカ。『変身』分かりますか？ ある朝起きたら、自分が芋虫みたいになって。あの設定、すごいと思いませんか？ 小説って嘘だけど、ウソを書く事によって、ホントにもっと迫る事がありますよね。

カフカはめちゃくちゃ否定的な人です。彼の書簡集が残っているのですが、一体どうやったら、自分の事をこんなに卑下できるのかという文章。元気な人は破り捨てたくなくとも思います。

「僕は人生に必要な能力を何一つ持っていない。ただ人間的な弱みしか持っていない。無能。あらゆる点で。しかも完璧に。」めっちゃ暗い。

ところが頭木さんは「どん底の中で、この言葉に本当に励まされた」と言うんです。

「カフカみたいにすごい小説家でも無能、完璧な無能って。僕が今自分自身に思っている気持ちに1番ピッタリ寄り添っている。カフカのような偉大な人も、僕と同じようなところを通っていたんだ。というか、カフカが、俺も一緒だと寄り添ってくれてるような気持ち。その時、絶望は名言に変わった」。

私も最初の妻を亡くした時、「辛かった」という事をブログに正直に書いていました。そしたら、ある所に行った時、一人の方が面会に来られて「高原さん、伝道者やろ。いつまでくよくよしてんねん。女々しいわ。もうやめろや。」私は腹は立ちませんでした。というのは、この方も奥さんを亡くしているんです。

「俺なんか、3か月で乗り越えたわ。」感受性というのは一人ひとり違いますからね。

それを聞きながら、励ます人の弱点というか…。人を励ましている時、数週間か数か月間、励ます事はできても、励ましている相手が1年以上立ち直らないと腹立てませんか？

「俺がこんなに励ましてるのに、いつまでくよくよしてんねん」みたいな。逆切れするんですよ。それ、もう励まさないで下さい。逆切れするんやったら、ほっといて。

だけど、キリストはあわれみ深い方です。ここでのあわれみ深いというのは、相手を感じるように感じるという意味。世の中には身から出た錆で、悔やんで当然の悔やみ方もあると思います。が、神様は「罪人が悔やむのは罪のせいだ！勝手に悔やんでおれ！」とは言われぬ。

この方は、私の心に寄り添って、私を感じるように感じ、私の立場に立って考え、見、そして、私の立場の中から、良くなるように働きかけて下さる。

私の少年時代は、あんまり良い子供時代ではなかったと思います。父親代わりの人との関係が中々上手くいかなくて、よく衝突しました。私が小学生の時、車に乗って、弟と口論が始まって兄弟げんか。自分の息子たちを見ると不思議やねん。ここに（目の前に）2人いてるんですけど、めっちゃくちゃ仲いいんですよ。ある時、1つの布団に並んで寝てる姿見て「気色わるっ！」どこまで仲いいねん、おまえら。

私は弟とめっちゃくちゃケンカしました。その時も段々キーっとなって来て、運転しているその人はそういう事が嫌い。その時、生駒山（奈良と大阪の県境の山）に行っていたんです。もう夜。山奥で急に車止めて、私に向かって「降りろ。」私はまだ小学校2年か3年くらい。「えっ?!」「降りろ。」降りたら、そのまま行ってしまった。何分後かに戻って来たと思います。だけど、テールランプが山奥の角を曲がって、ずっと見えなくなって、真っ暗になった時、怖かった…！ただただ、怖くて泣いていました。

それから10年経って、20年経って、何かの折にふっとその事を思い出すのです。すると苦々しい思いが湧いて来る。「よう、子供にそんな事したなあ。何で、あそこまでする必要があったんだろう。」何か、怒りが湧き上がって来るんですね。「もう昔の事で、いいじゃないか」と思いたい。だけど、折り合いがつかなくて、自分の中で、やり切れないような怒りが吹き上げて来る。

ところがある時、「キリストは私を感じるように感じて、いつでもどこでも、人生のどのタイミングに於いても、すぐそばにおられたのだ」という事が分かった。

「あの時、1人で置き去りにされたと思っていたから、苦い思いになってしまった。でも、自分は気がついてなかったけど、目に見えないキリストがすぐそばに寄り添っていた。そして、私を感じていた恐れ・悲しみ・怒りをキリストも感じていたんだ。」それが分かった瞬間に、苦さがふっと消えました。

今あの時の事を思い出すと、何か絵を見るように、小学校低学年の私をキリストがハグするようにして、「大丈夫、大丈夫」と言って下さっているイメージが湧いて来ます。

「イエス様は私の親友で、人生のどの段階に於いても、私が独りぼっちという時代はなかった。どの場面でも、私がキリストを発見できなかっただけで、キリスト/神様の方では、私を見捨てた瞬間はただの1秒もなかった。キリストはあそこで、あわれみ深い大祭司として、傍らにおられたのだ。」

そう思うと、あの苦い思い出が甘い思い出に変わります。

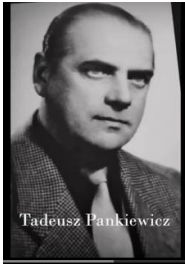
大きなネジと小さなネジは、歯車の山が違うのでかみ合いません。でも、大きなネジと小さなネジの歯車の間に中間のネジを入れたら、両方共かみ合って回転するでしょう。神と人との中間歯車のように、神には忠実さ、人にはあわれみ深さによって、いかなる罪人をも神に繋ぐ事ができる方があわれみ深い大祭司です。このあわれみ深い大祭司の中に救いがあるのです。

ここで、ポーランドで見た事を皆さんと共有したいと思います。クラクフ。現在はポーランドで3番目

に大きい町です。ポーランドはヨーロッパ最大の面積を誇り、その国境をちょっと行ったらモスクワという黄金時代がありました。その大ポーランド時代の首都がクラクフ。ワルシャワが首都になる前です。しかし、ここが、やがて大変な目に遭います。1939年9月1日、ドイツがポーランドに入って第2次世界大戦が勃発。その時、このクラクフに大きなゲットーが造られました。ゲットーとはユダヤ人隔離政策で、ユダヤ人だけ選別して、高い壁の一角に押し込めてしまうのです。

まず、ユダヤ人を追放するために、彼らの家の調度品や家具を、全部広場に出して炎上させました。それが起こった場所で、モニュメントで椅子がズラッと並んでいます。子供用の椅子があるし、大人用のもある。お年寄りがかかるのもある。老若男女関係なく、ユダヤ人というだけで、皆追放された暗黒時代。

(Figure1)



ここのモニュメントがあった広場に面している所に、イーグル薬局がありました。タデウシュさん (TADEUSZ PANKIEWICZ/1908-1993)。彼はユダヤ人ではありません。お父さんの代から薬局をやっており、彼自身も薬剤師です。ゲットーのために壁が造られるのですが、彼の薬局がゲットーのど真ん中になる。「ユダヤ人を押し込めるから立ち退け!」

しかし、タデウシュさんはナチスに交渉。「私は親父さんの時代から、ここでずっと薬局をやっています。ゲットーの周りにナチスドイツが入って来ますが、ゲットーをこのまま放置したら伝染病が蔓延しますよ。伝染病は壁なんか簡単に乗り越えます。結局ナチスドイツの皆さんが、大変な被害を被るのではないですか? 最低限の衛生を確保するために、どうか営業を許して下さい。」プラス袖の下/賄賂。賄賂で、ここに確保しました。ナチス政権下でも、賄賂は絶大な力を発揮しました。これはね、しなさいと言っているんじゃないですよ。誤解しないで下さい。「ここの集会、賄賂勤める」そうじゃないですよ。

ナチスから与えられた許可証があります。つまり、ユダヤ人しかいないゲットーの中に、24時間営業のポーランド人の薬局が、戦争中ずっと開業されていた。ここはユダヤ人にとって、必要な物を外の世界から取り入れるための唯一の出口。タデウシュさんは「ユダヤ人を何とかして救いたい」と、薬だけではなく、食料や様々な道具・必要な物を全部、自分たちが何とか工面して中に入れていたのです。

彼らがやった中で1番大きな事は、このままだと全滅させられるのが分かった時、ユダヤ人の子供たちを外国に逃がした事です。外面上はただの物にしか見えないように、子供を小さな箱に入れて、ある子は連合軍へ。ある子はパレスチナへ。

ちっちゃな子供が小さい箱に入れられたら「わーん」泣くでしょ。薬局ですよ。一服盛るんです。完全睡眠状態・昏睡状態にして、気がついたら、お父さん・お母さんと生き別れ。だけど、このようにして、あのゲットーのど真ん中から、たくさんのユダヤ人たちが救われていったのです。

なぜ、ユダヤ人たちがこの薬局に駆け込んで色々出来たのか? それは、ゲットーの中にあっただから。周りは全て死の世界ですが、タデウシュさんがユダヤ人のただ中に降りて来た。だから、ユダヤ人はここに駆け込んで、助けを求める事ができたんです。そして、ここがチャンネルとなって、外部世界に脱出する事すらできたのです。これは、ひな型のようなのです。

イエス・キリストは、私たちの手の届く所にまで来て下さっています。あなたのための救いは全部完成しているのです。皆さんが「今日、救われたい。」「今日、永遠の命が欲しい。」「今日、罪の赦しが欲しい。」と思ったら、今すぐ、この瞬間に得る事ができるほど、キリストは近くにおられます。このキリストに信頼し、自分の救い主として受け入れる。これは本当に素晴らしい事ではないかと思えます。



